

聖書：コリント人への手紙第一 12：4～11

説教題：同一の御霊によって

日時：2022年11月6日（朝拝）

前回の12章1節からコリント教会の公的礼拝で生じていた諸問題の3つ目、御霊の賜物に関する話が始まっています。これは14章の終わりまで計3章に渡って書かれます。この三つの章を読んで分かるのは、その中心にあったのは異言の問題であったということです。今日の10節にさっそくその言葉が出て来ます。この異言とは人々の理解できない言葉で語ったり、祈ったり、賛美したりするもので、14章2節では「人に向かって語るのではなく、神に向かって語る」ものと言われています。それが人々に理解されるためには解き明かしを必要としました。またそれはしばしば恍惚状態でなされたようです。そのようなある意味で異常な御霊の現れは当然周りの人々の注目を引き付けます。そして人々は思うのです。あのように異言で神を賛美し、神とお話できる人こそ霊的な人である！神の霊の働きが豊かにある人である！と。そして多くの人々が自分もそれができるようになりたいと求めるようになります。あのような体験をしている人たちを見ると、自分の信仰生活は味気ないことのように感じる。そうしてある人々は悩み、劣等感を覚えます。一方、異言を話す人々は我々こそ霊的人間、現代の預言者であるとして、礼拝の中でこれ見よがしに異言で話します。このようにしてコリント教会の礼拝には大混乱が生じていたようなのです。

そんな彼らにパウロは、このことを知らずにいてほしくないと言って前回の3節で、「聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません」と語りました。聖霊の第一の働きは私たちにイエス・キリストの素晴らしさを見させ、キリストへの信仰告白へ導くことです。ですからそのように告白している人はみな聖霊を受けている人です。特別な現れを経験している人たちだけではありません。簡単に言えばクリスチャン全員が御霊を受けている御霊の人、御霊がともにおられる人です。

このことを基礎としてパウロは話を進めます。4節は「さて、賜物はいろいろありますが」と始まります。聖霊は私たちをキリストへの信仰告白に導いてくださいますが、そればかりではなく賜物も与えてくださいます。その賜物には色々あります。この後8節以降で、そのいくつかの具体的なリストを見ます。コリント人たちも賜物が

色々であることは経験を通して知っていました。しかしパウロがここで言いたいことは次のことです。それは賜物は色々あるが、その源は同じであるということです。それを与えたのは同じ御霊であるということです。ですから賜物はそれを私たちに分け与えてくださったお方のお心に沿って考えられ、用いられなければならないということになります。

さて4節で「賜物はいろいろ」と言われた後、5節で「奉仕はいろいろ」、6節で「働きはいろいろ」と言われます。この「賜物」「奉仕」「働き」は同じ一つのことを違った側面から表現したものとと言えます。それぞれはどういう関係にあるかと言えば、賜物は奉仕に用いられて働きとなるということでしょうか。そしてもう一つ私たちの注意を引き付けるのは、ここに三位一体が現れていることです。4節に「御霊」、5節に「主」、6節に「神」と出て来ています。ちなみに4節には印がついていて欄外を見ると、『与える方は』は補足」とあります。同じように5節にも印がついていて欄外を見ると、『仕える相手は』は補足」とあります。つまり原文をそのまま訳すと4節以降はこうなります。「さて、賜物はいろいろありますが、同じ御霊です。奉仕はいろいろありますが、同じ主です。働きはいろいろありますが、同じ神です。」言いたいことは色々な賜物や奉仕は働きがあるが、それらは同じ三位一体の神から与えられているということでしょう。ですから4節は言葉を補って「与える方は同じ御霊です」と訳されています。そのような視点からすると、5節の訳は少し問題があるように思います。5節は「仕える相手は同じ主です」と訳されていますが、パウロがここで言っているのは賜物や奉仕の源泉についてです。誰に対して奉仕をするかではありません。ですからここは奉仕を「与える方は同じ主です」とか、奉仕へ「召すのは同じ主です」などと訳するのが適切ではないでしょうか。6節に出て来る神も、働きの源泉におられる方として述べられています。パウロはこれら御霊と主と神について、それぞれに何か固有なことを語ろうとしているわけではありません。御霊、主、神と述べた後、まとめとなる7節では再び「御霊」ですべてが代表されています。そういう意味ではここは全部、御霊で表現しても問題なかったと言えます。しかしパウロの中で神はこのようにいつも三位一体の神として考えられていたということです。神は一つの神でありつつ、そこには多様性あるいは豊かさがあります。このような三位一体の神とのつながりの中でコリント人たちは色々な賜物と導きを受けています。

パウロが言いたいことは賜物や奉仕や働きは色々ですが、それらはみな同じ神に由

来し、その神から分配されているということです。ですから自分が持っている賜物を、まるで自分に由来するものであるかのように考えて誇ってはなりませんし、また自分の好き勝手な目的のために使って良いのでもないということになります。私たちの間にある色々な賜物はみな三位一体の神から与えられたものですから、私たちはその神のお考えに聞いて、その御心にかなうようにそれを用いる者でなければならないということになります。

7 節にはまとめとして二つの大切なことが述べられています。一つは「一人ひとりに御霊の現れが与えられている」ということです。御霊はクリスチャンをキリストへの信仰へと導くだけではなく、一人一人に必ず何らかの賜物を分け与えています。それが何も与えられていない人は一人もいません。もう一つは「皆の益となるために」御霊の現れは与えられているということです。一人一人に与えられている賜物は個人的な用途にだけ使ってはならないのです。それは教会全体の益に仕えるために与えられたものです。私たちはそれを私物化してはならないのです。私たちはこれを与えてくださった神の御心に沿って、みな益となるために、与えられた賜物を用いる責任があるのです。

さてこう述べてパウロは8 節以降で、色々な賜物のいくつかを具体的にリストします。ここには合計9 つの賜物が述べられています。聖書には他にローマ人への手紙12 章6~8 節やエペソ人への手紙4 章11 節に賜物のリストが出て来ますが、それらと比較して分かることは、重なる部分も沢山あるもののピットリ一致してはいないということです。ですから聖書にあるリストは賜物を全部網羅したものではありません。それらを参考にしつつ、実際にはもっと色々な賜物のことを私たちは考えて良いということになります。

さてここにある9 つの賜物は原文の構造からみても3 つに分類できるようです。まず一つ目のグループは「知恵のことば」と「知識のことば」です。これらは知的面と関わる賜物と言えます。知恵と知識はどう違うのか、多くの学者が色々コメントしていますが、はっきりした区別はなかなか難しいようです。ただし知恵はこの手紙で見て来ましたように特にキリストの十字架において示されている神の知恵と関係すると言えます。この世の知恵とは異なる神の知恵、神の御心を深く受け止めるところに立つ知恵です。知識もこの世の一般的な知識のことではなく、聖書啓示に関する知識、

神とその救いに関する知識のことでしょう。それをもって人々に教えることのできる賜物のことでしょう。二つ目のグループは「信仰」、「癒やしの賜物」、「奇跡を行う力」、「預言」、「霊を見分ける力」の5つです。これらは力と関係する賜物と見ることができます。一つ目の「信仰」は、特別な賜物としてリストされていますから、すべてのクリスチャンに与えられている信仰とは区別されたものことでしょう。この後 13 章 2 節に「山を動かすほどの完全な信仰を持っていても」という言葉が出て来ます。そのような特別な意味での信仰です。それは祈りと関係するでしょう。2 つ目の癒やしもそうです。ヤコブの手紙 5 章 14 節に「信仰による祈りは、病んでいる人を救います」とあります。祈りを通して人々の癒やしに仕える人、そのために神に用いられる働きをする人のことでしょう。3 つ目の奇跡を行う力は、今見た癒やしも奇跡ですが、奇跡は癒しだけに限定されませんので、それ以外の奇跡のことを言っていると思われれます。多くの学者はたとえば悪霊を追い出すわざのことなどをあげています。4 つ目は預言。これは基本的に神の言葉を預かって人々に取り次ぐことですが、後の 14 章 3 節で「預言する人は、人を育てることば勧めや慰めを、人に向かって話します」と言われています。そのように御言葉に基づいて人々を励まし、慰めることのできる賜物のことでしょう。5 つ目の霊を見分ける力については 14 章 29 節に「預言する者たちも、二人か三人が語り、ほかの者たちはそれを吟味しなさい」と出て来ます。ですから語られた言葉が真に神から出たものかどうか、聖霊によるものかどうかを見分ける賜物のことでしょう。そして最後 3 つ目のグループは「異言」および「異言を解き明かす力」です。異言については先に簡単に触れましたし、異言は解き明かしを必要とするものであることも先に述べました。さて以上のリストで注目すべきことは何でしょうか。それは問題の種となっている異言が最後にリストされていることではないでしょうか。異言を誇り、異言を聖霊の臨在の最高のしるしと高く評価していたコリント人たちは、パウロが賜物のリストをあげる際、それがトップに来ると考えたのではないのでしょうか。ところがなかなか出て来ないばかりか、逆に一番どん尻に置かれています。パウロはこうして異言を特別視するコリント人たちの姿勢に、いわば水を差しているわけです。それが一番大事なことではないよ！と。この後もそうです。12 章 28 節で再び様々な賜物がリストされますが、そこでも異言が一番最後です。その後の 29～30 節でも最後です。ですから異言を話せる人は特別に偉いということには全然ならないのです。

最後の 11 節は 7 節と同じまとめです。賜物は色々ですが、同じ一つの御霊がこれ

らすべてのことをなさいます。異言だけが御霊の特別な働きではないのです。ここにあげられている賜物のすべてが同一の御霊から出たものなのです。御霊は、それらの賜物をみこころのままに一人一人に分け与えてくださいます。聖霊が主権者です。その聖霊がお考えをもって、それぞれに賜物を分け与えておられるのです。

今日の御言葉のまとめとして以下の4つのことを心に留めたいと思います。一つ目は私たちにどんな賜物や能力があっても、それは御霊によって私に与えられたものであるということです。それは信仰を持った後に与えられたものかもしれませんし、生まれ持ったものが聖められて今そのようにあるというものかもしれません。「賜物」という言葉はギリシャ語ではカリスマで、恵みという意味のカリスに由来します。ですからそれは恵みによるものです。それは恵みによるものなのでから他人と比較して自分を誇るべきではありませんし、それで他の人を見下してはなりません。それを与えてくださった方の恵み深い御心に応えるようにそれを用いなければなりません。

二つ目に賜物の分配は御霊が御心のままに主権的に行われます。分配ということを考えれば、一人で全部を持っている人はいません。一人で完全な人はいません。自分一人を見れば足りないところが沢山あるかもしれません。しかし御霊が主権をもって、あの人にはこれ、この人にはこれ、そして私にはこれ！と分配しています。ですから私たちは高ぶるべきでないと同様、不満を抱くべきでもありません。御霊は良いお考えをもって、私に対しては私にあるものを授けてくださっています。それを受け止め、それに満足し、自分に分け与えられているものを活用することに思いを向けることが大切なことです。

三つ目は賜物は分配されていて、誰も一人で完全な人はいませんので、私たちは与えられている賜物を持ち寄り、互いに組み合わせられるようにすべきであるということです。カルヴァンは11節の注解においてこう述べています。「神の御霊がわたしたちひとりひとりに分け与えて下さるのは、わたしたちがふたたび一緒に持ち寄るためである。」 さらに言います。「すべてのものを与えられている者はひとりもない。だれでも、自分は十分すぎるほど持っているのだとして、他の人との交わりからしりぞき、自分ひとりのために生きることはゆるされないのである。・・・神は、私たちが互いに結び合わせ、互いに義務を負うものとされたのである。」 ですから自分は一人で信仰生活を送れるかのように信仰生活を考えるてはならないのです。オーケストラの各楽器

が互いに組み合わせられ、一つの豊かなハーモニーを奏できるように、私たちは他の人と協調する中で自分の賜物が用いられ、他の人と組み合わせられて、本来の意図された祝福に至るようにと取り組まなければなりません。

そして四つ目は皆の益となるために、教会という共同体全体の成長と祝福のためということです。私に与えられている賜物はこの目的の下に活用されなければなりません。この聖霊の御心を受け止め、感謝して、聖霊に喜ばれる歩みをささげる者とされたいと思います。そして同じ一つの御霊に導かれて、多様性と一体性が豊かに組み合わせられた素晴らしいハーモニーを奏でて、神の栄光を現し、またそこに永遠の喜びを見出し、味わう神の民の歩みへと導かれたいと思います。